

圖案を調製し該圖案に基き昨年七月起礎の起工に着手し其上に取付くべき金鶏は同校に於て沼田〔一雅〕助教が原型、櫻ヶ岡助教が鑄銅を擔當して夫れく製作中の所基礎は既に竣工し金鶏も此程に至りて全く鑄造を終り目下其仕揚げ中なりと云へば青葉城頭に一大偉觀を現出するも遠きにあらざるべし 本碑はゴシック式の石柱上に鑄銅の金鶏を置き其前後に鑄銅のパズルを裝置し、「昭忠」の文字及び起工竣工の年月を表記するものにて其他は總て石材を用ひ總高六十尺、金鶏の左右翅の直徑一丈五尺餘なるが鑄銅に要せし地金は千四百餘貫に上り其建設總豫算は二萬千二百圓なりといふ

(明治三十五年八月十二日『東京朝日新聞』。挿図は省略する。)

6 御買上げ

品目は135頁「成績品の 天覽」参照。

関連事項

① 職員任免その他

明治三十四年
一月二十九日 海野美盛フランスより帰国。

二月一日 千頭庸哉雇を命ぜられる。

二日 教授山田鬼斎歿。

五日 武田五一解嘱。大沢三之助嘱託を命ぜられる。

十三日 岩村透西洋美術史授業嘱託に復帰。

三月二十七日 田島応親解嘱。合田清仏語授業嘱託に復帰。

二十九日 海野美盛復職(教授)。

四月十一日 津田信夫雇(依嘱製作担任兼鑄金科助教)を命ぜら

れる。

五月三日 助教櫻杉浦宗行歿。

十五日 黒田清輝、久米桂一郎帰国。助手小林万吾助教を命ぜられる。

命ぜられる。

二十九日 久米桂一郎復職(教授)。

八月九日 久保田鼎校長を辞任。正木直彦校長を命ぜられる。

久保田、正木送迎会(上野精養軒)開催。

十二日

三十一日 今泉雄作解嘱。

八月 瀧精一解嘱。

九月三日 溝口宗文、本田種竹、新井春次郎解嘱。

六日 蔵原惟郭解嘱。

十二日 中沢澄男解嘱。中村如等、高橋烏谷解雇。大村西

崖彫刻科授業嘱託を解かれ、美学及び美術史授業、支那歴史授業嘱託を命ぜられる。関保之助東

洋考古学授業嘱託を命ぜられる。

助教授島田友春辞職。同天草神来休職(辞職)。

雇千頭庸哉助教に任命される。

助教授本多天城辞職。

二十日 下村観山、寺崎広業教授に任命される。

三十日 助教授白井雨山彫刻研究のため二ヶ年間ドイツ、

フランス留学を命ぜられる(十一月二日出発)。

十一月九日 菅野真雇(文庫掛)を命ぜられる。

十一月九日

十二日 岡田秋嶺助教に任命される。

二十六日 白濱徴教授に任命される。

十二月十八日 嘱託黒岩淡哉助教授に任命される。

なお、本年十一月以降および明治三十五年以降の職員任免については『東京美術学校校友会月報』記事抜粋の項を参照されたい。

② 正木直彦校長就任

正木直彦校長就任の経緯

明治三十四年八月九日、正木直彦が校長に就任した。前校長久保田鼎は辞任後、帝室博物館主事を勤める傍ら本校商議委員を兼ね、後には奈良帝室博物館長、京都帝室博物館長等を歴任する。

正木は文久二年十月二十六日、和泉国堺夕栄町に生まれた。大阪府立堺中学校卒業後、明治十七年七月東京大学予備門に入学。同期生に夏目漱石、山田美妙、正岡子規、南方熊楠、白濱徴らがいた。

〔『回顧七十年』正木直彦著。昭和十二年四月。学校美術協会出版部〕同二十五年七月、帝国大学法科大学法律科卒業。翌年十月より奈良県尋常中学校校長となり、帝国奈良博物館学芸委員（同二十八年）、古社寺保存委員（同二十九年）等を兼任した。その頃、岡倉寛三と東京美術学校奈良分校敷地をめぐって接触があったことは本書第一巻で述べたとおりである。同三十年六月、文部大臣秘書官となって東京に移り、以後、文部省視学官、大臣官房秘書課長を勤め、高等教育会議幹事、第一高等学校教授を兼任。同三十一年十一月一日、大臣官房文書課長（翌年八月まで）兼美術課長となり、同三十三年十一月十七日、美術課長を免ぜられて同年同月二十二日欧州へ向けて出発。翌三十四年三月二十六日に帰国し、八月に至って本校校長に任

命された。

この経歴からも明らかのように、正木は文部官僚のエリートコースを順調に歩んで来たが、本校校長となるにおよんでそのコースは一転し、美術行政に身を挺することとなった。彼は昭和七年に校長を辞するまで、実に三十一年間、他に官僚としての栄達を求めず、美術教育を中心とする美術行政の推進に尽くすのである。本校の歴史を通観するとき、変動のないことが必ずしも良いとはいえないにせよ、明治三十一年の美術学校騒動のときのような波瀾が再び起こらず、学校の体制を維持し得たのは正木校長の敏腕に負うところが大きいといわねばならない。したがって、正木の校長就任は本校および美術界にとって特筆すべき事件であったといえよう。

校長就任の経緯については正木自ら『回顧七十年』（前出）に比較的詳しく記している。それによると、正木が文部大臣秘書官となつたとき、文相は松方内閣の蜂須賀茂韶であったが、間もなく第二次伊藤内閣の浜尾新、次いで第三次伊藤内閣の西園寺公望、同外山正一、大隈内閣の尾崎行雄、同犬養毅、山県内閣の樺山資紀と目まぐるしく更迭が行われた。正木が美術行政について一つの計画を抱くようになったのは大隈内閣尾崎行雄文相（明治三十一年六月～同年十月）のときで、当時の専門学務局長高田早苗と計画を練った。これを正木は

高田君は、日本には国立劇場が無いから今の中に文部省の手でこれを造りたい、といふし私は又、博物館、美術館といふものを大いに興し一方では佛蘭西の制度の如く、文部省といふものを教育